

2023 年度 社会福祉学科

小 論 文

〔自己推薦 A O (A)〕 14-02

注 意

1. 監督者の合図があるまで問題冊子は開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙のきめられた箇所に記入してください。

以下の文章を読んで、問に答えなさい。

貧困者はもう十分「自立的」であり、それが問題なのだ

こうして、戦後日本の貧困の「かたち」は、戦後の日本社会を映す鏡のようなものであった。特に、(中略)自発的な脱貧困への努力(したがって、貧困への否定的なレッテル貼りの強さ)と、貧困を覆い隠す企業や市場の装置の強大さは、いわばペアになって、貧困をつねに個人が対処すべき領域に引き戻し、また市場の装置^①に吸い込んでいく日本的構図を形成してきたといつてよい。不安定な就労から就労へと渡り歩き、あるいは売血や借金を繰り返す等、人びとにとっての貧困はつねに自らの個人的な努力で対処すべきものとされてきた。貧困に対する多様な政策があっても、親切そうに「救いの手」を差し伸べるのは消費者信用や貧困ビジネス等であって、人びともそれにしがみつこうとする。

「失われた二〇年」には、脱貧困への努力の勢いは弱まっており、そうした生活態度を共有して支え合う家族も縮小しきっているにもかかわらず、依然として人びとは貧困を個人で引き受け、また市場の甘言に乗せられてしまう。日雇い派遣から三カ月間のパソコン工場勤務となったシュウジさんの喜びと、借金返済計画の皮算用は簡単に裏切られた。再び彼はネットカフェを拠点として不安定な労働へと戻っていったに違いない。戸籍や住民票も不定のまま、日本が誇る母子保健対策さえすり抜けて、飛び込み出産時にだけ立ち現れた貧困は、退院後すぐどこかへ潜ってしまっていて見えない。労働宿舍や安アパートの火災は今日まで幾度となく繰り返され、その時だけ住人の貧困と住環境の問題がクローズアップされるが、「住むところがないよりまし」とする住人や市場の前で、抜本的な解決の道は遠い。

「失われた二〇年」の中で「発見」された「降格する貧困」への処方箋は、自立支援や伴走型支援であった。いずれも、貧困のただ中にある人びとの「意欲」を喚起し、制度による支援によって、再び市場に参加して仕事ができるようになることが目論まれている。だが、貧困の責任をつねに個人に押し付け、市場や企業によって貧困が常に不可視化される中で、貧困者の「自立」を促すというのは奇妙な構図である。なぜなら、彼らの多くは、すでに何とかしようと努力してきたからである。しかもその果てに、旧産炭地区での被保護世帯について上野英信が述べたように、「およそ「意欲」だとか「欲望」だとかという名をもって呼ばれるものの一切が、それこそ粉微塵に破壊されつくしている」(上野

1960：184) とすれば、こうした施策が何の役に立つのか分らない。

「自立」支援という政策目標は、個人の怠惰が貧困を生むという、きわめて古典的な理解に基づいている。だが問題は、怠惰ではないのだ。貧困を個人が引き受けることをよしとする社会、そうした人びとをブラック企業も含めた市場が取り込もうとする構図の中では、意欲や希望も次第に空回りし始め、その結果意欲も希望も奪いさられていく。だから問題は、「自立」的であろうとしすぎることであり、それを促す社会の側にある。

奇妙といえ、子どもの貧困対策もそうである。この政治戦略の根底には「少子化」への不安があって、たとえば、子どもの貧困が注目されても、「児童手当」が家族の日常生活費に回されることへの強い警戒心があるなど、ちぐはぐさが目立つ。むろん、望まない妊娠に戸惑う貧困女性、風俗の寮を転々とする母子などの存在が視野に入っているとは思えない。つまり、「子どもの貧困」対策において、子どもの養育と親の貧困というトータルな見方が希薄であるだけでなく、今日のライフサイクル全体と貧困との関係を問い直す視点が無いのが奇妙なのである。いいかえれば、「子どもの貧困」対策の大合唱があっても（具体的な施策は貧困ではあるが）、養育期の家族の貧困は、依然として個人的な対処と市場での一時的な解決という、日本的構図の中にあるということであろう。そこへ切り込む政策がなければ、子どもへの「投資」が貧困の循環を断つきっかけになるかどうかは定かでない。

確かに、「失われた二〇年」において次々と提唱された、「若者の貧困」、「子どもの貧困」、「下流老人」といった年代別の貧困の「かたち」は、それに対応する政策、特に若者と子どもを対象とする貧困対策を引き出しはした。だが、それらは実質的には、世代間の分断を引き起こす側面があり、一定の財源を、高齢者から若年層へと振り分ける結果にしかなっていない。

こうして、こんにちの貧困問題の核心は、個人的対処を賞賛し、貧困を覆い隠す市場の装置を放置しつつ、「自立」支援や「子どもの貧困」対策をふりかざす政治にあると言うべきであろう。「マージナルな貧困」のコントロールに成功せず、そこに「降格する貧困」が重なり合っているのも、こうした状況をよしとしてきた政治秩序の責任といえる。もし、本気で貧困問題を解決したいとするなら、日本的構図に追いつかない積極的な貧困対策が、自立支援の前に必要である。「積極的」という意味は、個人の対処や市場による吸引を制限し、それらの構図に対抗する「強い」社会政策を打ち出すということである。^②

出典：岩田正美著『貧困の戦後史：貧困の「かたち」はどう変わったのか』筑摩書房，2017年，pp.322-326.

問1. 下線①の「市場の装置」とは何か。文中の言葉を用いて，100字以内で説明しなさい。

問2. 下線②の「個人の対処や市場による吸引を制限し，それらの構図に対抗する『強い』社会政策」は，どのようなものであるか。具体例と，取り上げた政策がなぜ貧困対策として有効なのかも含めて，200字以内で説明しなさい。

問3. 「貧困者はもう十分『自立的』であり，それが問題なのだ」という筆者の主張について，何が問題とされているのかを簡潔にまとめた上で，この主張に対するあなたの考えを述べなさい（字数は問いません）。